

1999 年度上半期報告書

一橋山岳部

<目次>

巻頭言

4 月 17～18	個人山行	富士山	P2～
4 月 29 日～5 月 6	個人山行	剣岳北方稜線	P2～
5 月 27～30	雪訓	北アルプス涸沢定着	P4～
6 月 26～27	日本山岳会学生部小川山集会		P6～
7 月 31～8 月 8	夏合宿	北アルプス真砂沢定着	P6～
9 月 13～15	個人山行	越後三山	P11

部室の場所

(大学構内地図)

<巻頭言>

他の山岳部の連中や、OB に聞かれて一番嫌な質問がある。「今、何人いるの」そのたびに、面倒な部の状態を説明せねばならないからである。それで、最初にその質問には答えておこう。あらかじめいっておくと、これを読んだ人とこの手の話題をこれ以上する気になれない。現在、リーダーは私、宗像である。それに、サブリーダーは4年の田中で、1年は山田がいる。以上。思い返すと、上半期にも頭の痛い問題はいくつかあったが、それも今に始まったことではないので驚かない。リーダーを引き受けた久田が休部というのは、たいがいこの手の問題には慣れっこになっていたが、驚くというよりも、むしろあきれた。

田中がけがが大変なときでもあったし。これ以上こぼすのはやめておこう。少ない人数だからといって、不十分な活動しかできないわけだはないということは、私自身がいくらか分かは証明してきたつもりだ。むしろ、いま部は全員が戸惑いつつも山に向かおうという気になっているので、落ち着きを取り戻している。私自身は、これまではリーダーとなっても次の年にはやはり学生であるということから、いくらかの余裕はあったが、このリーダー取りで、現役として部にかかわるのは最後になるだろう。とはいえ、来年も学内にとどまることになったので、苦しい立場になる山田をバックアップすることになるだろう。

大学山岳部というものが一定のある程度決められた内容を例年こなしていただければ、それに飽き足らない人間は、やがて山岳部というものを消化してしまったと思い込み、そこから脱却しようと試みる。一方、山岳部が、限界を設けず、個々人の活動について許容範囲を広げるならば、組織は個々人の活動をサポートするものとして有益なものとなるだろう。実際はそれほど単純ではない。山は刻々表情を変える。梓にはめられるほどたやすいものではない。自分としては打算で動く人間であると同時に、幾らか分かの信頼関係をたいせつにしたい人間であると思っている。今の

ところ、山岳部という小さな組織は私にとって、その広がりとともに、利益があるものだったし、それを通して作ってきた人間関係に依存した面もまたあったのである。山で言えば、遭難した時に助けに来てくれるという打算と、助けに来てくれるだけの人間がいるということは、限りなく近いほうがいいと思っている。それはもはや山岳部にはとどまり得ないかもしれない。そう思いつつ、山岳部での最後の活動を肅々と、かといってことなかれ主義に陥ることなく、あえて言えばアグレッシブにすごしたいと思っている。

代表 宗像 充

1. 個人山行 <富士山 御殿場口>

4月17日～18日

参加メンバー: 田中(一橋)・L井ノ口(法政)・都筑・岡本(立正)・内野(学習院)・藤岡(横国)・山崎・渡邊(早稲田)

4/17(土) 晴れのち曇り

10:20 新五合駐車場出発 12:10 テント設営 13:10 出発 15:50 六合目付近 16:10 帰幕

日本山岳会のマッキンリー遠征のメンバーでプレ的山行として富士山へ。

朝 7:00 新宿発の高速バスに乗り、9:30 頃御殿場駅に。荷分けをして、新五合駐車場までタクシーで入る。荒涼とした黒く赤茶けた火山灰の砂漠のような道をゆっくり登る。五合目付近の小屋の横で幕営。設営を終えてから、コンテの確認をした後コンテを組んで行けるとこまで行く。途中から雪面もでてきた。タイトロープビレイをしながら、標高 2500 メートルぐらいまで登り、そのまま、テント場まで下りた。

4/18(日) 曇りのち雪 4:15 起床 5:55 出発 8:00 六合五勺 8:05～8:50 ユマール練習 8:50 下山

10:30 テント撤収 11:00 新五合駐車場

天候はあまり期待できないことから、ピークを目指すより、今日はメンバー間での技術確認をすることに。上に登るにつれ、途中から雪がちらつきだし、雪も風も強くなった。六合五勺ぐらいまで登り、ロープをFIXしてユマールの使い方を確認する。雪、風は強くなるばかりで、そのままコンテを組んで雪がきれいのところまで下る。テントを撤収し下山する。11:00 に駐車場に着く。頂上にも行きたかったが、参加メンバー間でのコミュニケーションが取れた事が最大の収穫だった。それぞれの大学の登り方の違いを知り、テント内での生活・ロープ技術の確認ができた。今回の山行を成立された法政に井ノ口が一番の功労者で、お疲れ様でした。

文責: 田中

2. GW 個人山行 北方稜線～剣～室堂

4月28日夜発 29日入山 5月6日下山

参加メンバー: 宗像・田中・長岡(関西学院)・森(関西学院)

4 月 28 日(水) 急行能登:上野～

4 月 29 日(木) ～魚津—宇奈月駅～平和の像前 8:20—僧ヶ岳 14:50

魚津駅で電鉄に乗り換え。雨が降っている。宇奈月に着くと止んだ。駅の待合室で関学の御見送りを食べ、朝食に。タクシーで平和の像まで入山。ザックに装備を着けなおしていると、駅にいた社会人 2 人が来た。その P とは小窓までつかず、離れずえを繰り返した。最初の林道合流点まで夏道をたどる。社会人 2 人が間違えていた。ここは、悪かった。登るにつれて海が見える。ブナ林が気持ちが良い。僧ヶ岳山頂は気持ち良く、毛勝山がデカイ。

4 月 30 日(金) △5:25—ウドの頭手前のコル 14:45

朝、良く晴れているが放射冷却で寒い。雪庇の状態はかなり不安定だった。ウドの頭に出るのに、右側のスラブをダブルで懸垂し(それでも雪渓に届かなかったが)。雪渓を登り返して、コルまで行って広くはないがテントを張った。余りの好天で脱水状態に近く、梅酒の雪割が体に染み込んだ。

5 月 1 日(土) △5:00—9:05 毛勝山北峰手前—1800m地点 14:25

ウドの頭の登りは、遠くからは急傾斜にみえたが、登るとそれほどでもなかった。完全に登りきらず、右側から谷沿いに巻きつつ進み、平杭乗越へ。そこで一休。関学 OB の冥福を祈りつつ酒を撒く。天国への道とはうまいものだ。北峰手前で休む。ここからは、稜線散歩で快適だった。剣も見える。順調に、釜谷山、猫又山、に進む。確かに猫又山山頂付近は広く、なだらかで、山スキーをしたら気持ち良い斜面が広がっていたが、ホワイトアウトしたら恐ろしい。ここから、夏道が一部あり(誰が道を開いたの?)これを辿る。ブナクラ谷乗越に出るところは、分かりにくく、長岡さんの見事なルーファイで、獣道を拾って懸垂せずに白萩側から一度巻いて、ガラガラのルンゼを下り、竹のヤブを漕いで乗越に出た。もう少し歩いて、赤谷山側に近い台地にテントを張る。

5 月 2 日(日) △4:45—赤谷山—9:55 大窓 10:15—小窓 15:25

3:00 起床。出発する前に雨がぱらついたが、この日も天気が良くなった。赤谷山を登りきると、剣が視界に飛び込む。2 人 P と、4 人 P に出会う。トレースに従い、白萩山をトラバース。赤ハゲ手前のコルで一休。赤ハゲから、いったん下るところが悪い。ハイ松沿いに下り、白萩側をトラバース。登り返す所が怖い。先頭の田中がそのまま行ってしまうが、ザイルをフィックスし、森君は、ユマーをセルフに使い登る。ローソク岩は黒部側から巻く。池の平山の登りも急斜面で緊張した。

5 月 3 日(日) △6:05—小窓の王南壁—8:40 三の窓 15:25

4:00 起床。しかし、誰も素早く起きない。雪の音がする。5:30 出発のはずが、結局 6:05 出発。小窓尾根から来たらしい大人数の P が居て、早目に長めに休憩。天気は曇り。ちと寒い。剣尾根を登攀している人達や、R4 が見える。小窓の王南壁の巻きは、右側を、ダブルで 1 ピッチ懸垂。そこか

ら古いフィックスロープを使ってトラバース。5 分ほど歩くと、もう三の窓だった。ここは、チンネを登る人達のテントや、雪洞+ツェルトがいくつか有った。チンネにはクライマー達に取り付いていた。整地された跡にテントを張る。MN コンビは左稜線に取り付くかどうかで迷っていたが、結局トライせず。

5 月 4 日(火) 停滞

5 月 5 日(水) △停滞 宗像+長岡 チンネ左稜線2P 敗退

今日は、宗像さんと長岡さんは、「午後から回復」と言う予報に望みを託し、チンネをトライする予定。田中、森君は、今日も沈。11 時が登るリミットで、雪降る中、出て行った。12 時頃帰ってきた。長岡さんが 2 ピッチ目で落ちたらしい。幸い、アイゼン、その他冬壁装備だったが、全くけががなかったようだ。

5 月 6 日(木) △4:35—7:15 本峰—9:45 前剣—14:45 室堂

この日は午後から天気が回復するという。もう誰も居なくなった三の窓でテントを撤収。まず、今日の核心の一つ池ノ谷のガリーを登る。ガスでよく見えない。かつ、雪崩が怖い。先頭の長岡さんが、ステップを切りながら登る。荷物はずいぶん軽くなった。稜線に出るがホワイトアウトしており、良く分からない。途中、宗像さんが、山酔いがすると言ひ、赤旗をつかっていた。途中、長次郎谷の頭に出る前に細くなった所で、宗像さんが、スタカットする。本峰に着くがとにかく寒い。祠だけが山頂を示していた。やっと来た割には何も見えず、感慨が沸かなかった。早月尾根との分岐には、指導標が出ていたが、その先がガスで良く分からない。ヨコバイかタテバイのどちらか良く分からないがクライムダウンをしつつ、田中がリード。そしてフィックス。森君、長岡さんがプルーミックで下りてきた。強風で寒い。まるで厳冬期みたいだ。そこから、ハシゴを使おうとしたが、結局平蔵谷側へ懸垂して下りた。平蔵谷のコルは文登研で来て見覚えがあり、嬉しくなった。この辺りから、青空が見え始めた。前剣の下りで 1 ピッチ、ダブルで懸垂し、クライムダウン。我々に残されていたのは室堂までウィニングロードだった。

文責:田中

3. 雪上訓練～涸沢定着～

5 月 27 日～30 日

参加メンバー:CL 宗像(5 年)、SL 久田(2 年)、田中(4 年)、山田(1 年)

5.27 (雨) 6:30 上高地～7:40 明神～10:30 徳沢～11:30 横尾

本日は天気予報どおりの雨。こいう時だけ当たる天気予報を恨めしく思う。途中雨宿りをしたものの順調に横尾まで来たが、この大雨のため横尾から先は止めたほうが良いと横尾のオヤジが言い、それに宗像が賛同。ここで停滞す。

5/28 (晴れのちくもり時々雹)

5:00 横尾～9:00 涸沢 B.C.～その辺りで雪訓～15:00 終了

今日は朝から天気がよかった。3 時頃に起き、昨日のうちに行くはずだった涸沢へと向かう。途中涸沢にかかる橋が見当たらず右往左往し、結局危なそうな雪渓を渡って涸沢に向かい、山田が最後にばてながらも何とか無事到着。早稲田を右上に信州大を左に見ながら雪訓開始。雪上歩行・ピッケルストップの練習をする。雪はそこそこ硬くピッケルストップがまあまあ利いた。天候が悪くなってきたので引き返し、テントの中でくつろいでいると涸沢小屋のオヤジが、我がテントに訪れ、「あの雪渓をわたったのはお前えらだろ。あの雪渓に足跡つけてきて後からくる人がきたらどうする？お前えらはザイル持っているいいかもしれねえが……(略)」と怒られる。どうやら我々がわたった雪渓の上流側に橋があったらしい。これに対し宗像、こちらに非があるのになぜか「こちらの意見も聞けよ！」と逆ギレ。この根拠のない逆ギレにあれほどどどかかったオヤジもとうとう 2・3 言放言して帰り、このテントにも平和が訪れる。

5・29 (晴時々曇り)

5:00B.C.～その辺りで雪訓～9:30 出発～13:00 奥穂高岳～15:00B.C.

今日も天気が良い。この陽気の中、朝からピッケルをもって雪と格闘。今日はザイルワークとアイゼン歩行の練習も加わる。雪訓を 4 時間ほどやって奥穂高に向かう。穂高小屋からアイゼンをつけて登る。頂上は天気がよく富士山まで見えた。が、寒いのでそこそこに帰る。帰りは雪が柔らかく、ちょっと危ないところもあったが無事に通り過ぎ、穂高小屋からはそりみたいにして下り、あっという間に B.C.につく。テントにつくと、元気な宗像と久田はカイトをあげ、無邪気な少年に戻っていた。

5/30 (晴) 5:00B.C.～7:30 北穂高岳～事故発生～12:00B.C.～17:00 上高地

アイゼンをつけ北穂高へ。今日も天気はよく、頂上から槍まで手が届きそうであった。30 分ほど頂上において下り始める。途中雪が柔らかくなったのでアイゼンを外す。最終日ということもあり気が緩んだのかグリセードが出来る宗像・田中とできない久田・山田の距離が 200m 程離れる。そして 8 時 40 分。先頭を走っていた田中に自然落石がぶつかる。場所は北穂小屋と涸沢小屋のちょうど中間点。落石に気づいた田中以外の三人は、落石があるのに気づき「ラク」と叫ぶもグリセードをしていた田中は落石に気づかず、右腕に落石が当たったのだった。どうやら右腕を骨折したらしい。とりあえず久田を涸沢小屋に救援を呼びにやらせ、残った宗像と山田は丁度北穂に向かっていた泉州山岳会の方を呼ぶ。泉州山岳会の方は応急処理をしてくれ、また携帯電話で涸沢小屋などに連絡してくれた。この後北穂小屋から、小屋のお兄さんが来る。小屋からみていて何か異変があったのに気がついたのだそうだ。そしてお兄さんはトランシーバーでヘリの要請をする。10 時 20 分、ヘリが来る。田中は豊科病院に収容される。この後我々は協力をしてくれた方々に礼を言った後、涸沢に戻り急いで上高地に下山。松本で OB に報告をし、帰京するのだが、今回の山行

での反省点はまずメンバーの距離が離れすぎていて、田中が我々の声が聞こえなかったこと。そして泉州山岳会の方々が偶然いたからいいようなものの、いなかった場合のことを考えるともっとメンバーに応急処理の勉強をするべきであるということ etc であった。

私にとり、初めての山行で事故が起こったことは、私に何とも貴重な経験を与えたと同時に山をなめてはいけないことは再認識させるには十分なものでした。以後気をつけて参りましょう。

文責 山田

4. <日本山岳会学生部小川山集会>

6/26,27 参加メンバー:宗像・飯島(幻の1年生)、他多数

久田が行きたいというので、忙しい中、暇を作って予定を入れたのに、直前になって連絡が取れなくなったため、説明会にきた飯島を連れて、日大の車に便乗させてもらって参加。まったく、だめな一年生みたいなことするなよな。今年の中根穂高氏を講師に呼んで、兄岩でコンペをやっていたが、僕らは遅れてきたので、最初、ガムスラブで練習した後、コンペの場所にいった。出る気はなかったもので、コンペと同じルートが終わった後にのぼってみたが、まったく最近登っていなかった割には、まずまず登れたので気をよくした。飯島は1年生の部門に出ていた。その後、5・11のルートに取り付けてみたが、案の定登れなかった。夜は、火の周りでみんな飲んでしたが、雨が降ってきたので、火も消えてしまった。翌日も朝から雨で、結局登れなかった。残念。

5. 夏合宿<北アルプス真砂沢定着>

7月31日～8月08日

参加メンバー:宗像・山田・井上 OB・古田 OB・古瀬 OB・太田(上智大学山岳部 OB)

7/31 (晴れ)

7:30 黒部ダム発～8:30 内蔵助出合 8:50～10:001 ルンゼTS

信濃大町で我々2人は太田と合流。バスは行ってしまったので2人連れのオバさんといっしょにタクシーで扇沢に出てトローリーバスに乗る。トンネルを抜けるとそこには何もなかった。あるのは木と山と土と道だけ。そこで朝食をとった後、出発進行!この日の黒部ダムは放流されていた。この放流で弧を描く水が太陽の光と共演して虹を作っていた。この虹を左手に見ながら進む。太陽の灼熱の光が頭上に降り注ぐ。そのため、山田、熱射病であまり動けなくなってしまう。それでも何とか今日の目的地のT.C.にたどり着く。やはり帽子は持ってくるべきだった。その後、山田はテントでお休み。宗像と太田は明日のAppendixの用意をし、長い1日が終わった。

文責:山田

8/1 (アペンディックス)

(晴れ) 4:30 起床 5:40 発～6:00 取り付き～12:30 終了点 1:00～2:00 取り付き～2:30TS

今回、このルートに限り、銀行マンの太田の参加。予想通り寝過ぎず。

1P目 太田リードで取り付く。取り付きは、基部が階段状になる手前。ルートは明瞭と資料にはあ

ったが、太田は少し右のほうに行ってしまう、フリーになったりしててこずっていた。主にナイフブレードとロストアローのネイリングで2時間近くかかった。ビレー中、虫に悩まされる。初めてのクリーニングはまずまず順調。

2P 目 宗像リード。大量のギアが肩にずっしり食い込む。アングル、それにブッシュにタイオフして少し登った後、右上へと伸びるクラックをフレンズのかけかえ。選ぶのに多少時間がかかるが、それほど難しくない。

3P 目 宗像リード。昨日のじゃんけんで核心のこのピッチは僕が担当することになっていたのに、俄然緊張した。凹角をブッシュを利用して右上の凹角へと入り込む。ここには残置があって、興ざめ。凹角の上のほうにナッツが残置されているが、ルートはその前に右の壁へと移った方がいいだろう。ナイフブレード1本落とす。さらに右に移り、白いクラックをフレンズをかけかえて直上。その上は切れ切れのクラックのピトンスカーを拾いながら、アングルのタイオフ。ナッツやスカイフックも使う。最後の3メートルくらいで、やはり顕著なクラックはなくなり、残置のマイクロピトンを使った。安心したところでアブミを落としてしまったが、ランニングに引っかかって止まった。最後のヤブヤブのピッチは太田がリードでようやく左岩稜上に出る。日差しが痛いくらいに暑い。中央壁に昨日から取り付いていたパーティーが下りてきている。左岩稜を4回懸垂で下のブッシュに降り立つ。

太田は河原でそうめんを食って帰っていった。 (宗像)

8/2 (晴れ)

3:00 起床 4:50 発～内蔵助平～10:40 ハシゴ谷乗越～1:00 真砂沢 BC

今日から宗像と2人だけの生活を送る。といっても今日入れて2日だけなのだが。未だ日が上がらない内にT.C.を出発。内蔵助平に向かう。出発して1時間後の休憩場所を地図で確認するも現在地がつかめないまま、再出発すると宗像が「悪い、道、間違えた。」などと仰せられる。どうやら道を山側に取りすぎたらしい。正しい道に戻って大幅に時間がかかり、内蔵助平に到着。ここで一息入れていざ真砂沢へ。と元気なことを言っていたのはここまで。内蔵助平を出ると、頭に容赦なく降り注ぐ陽光と、肩に容赦なくかかってくるザックの重さなどで、山田へたばる。宗像、目が怒っている。何とか前に進みたいが足が動かない。宗像に謝りながら、本当にやっとのことで真砂沢につく。2時間ほど休憩して明日のロングランの準備をする。と…。ヘッドランプが無い。どうやら途中で落としたらしい。そこで明日のロングランは内蔵助平まででヘッドランプが見つければロングラン続行。無ければ引き返すこととなった。宗像の首筋に血管が浮き出ている…。

文責: 山田

8/3 (晴れ)

4:00 起床 5:20 出発～7:30 内蔵助平～8:30 引き返し点 9:00～10:30 ハシゴ谷乗越～12:00BC

さあ、今日から1泊2日のロングランだ。行き先は竜王岳。ちょっと渋いところ。だけど、私のヘッドランプが無い。真砂沢小屋で借りようとしたが「いいですよ」と言われて出された物は、大きな懐中

電灯。これじゃ両手が自由に使えないよ～。というわけで、この懐中電灯をB.C.に残したまま、昨日の予定通りに内蔵助平に向かう。途中よく下を見て進むも見つからず、とうとう内蔵助平に到着。どうも昨日、道を間違えたときに落としたりしい。それでも宗像、ヘッドランプ無くてもいいっか、と昨日とは違った態度を見せ強行しようとする。しかし、その強行に「待った」をかけたのは私、山田だった。今晚の米を持って来るのを忘れたことを思い出したのだ。言いづらい雰囲気の中、勇気を出して言ってみると、意外にも宗像笑い出す。怒りをも乗り越えたということか。とうとう宗像も強行をあきらめ、昨日歩いた道、すなわち今朝も歩いた道をとぼとぼと二人は真砂沢に向かって引き返すのであった。 文責: 山田

8/4 (晴れ) (源次郎尾根) 宗像・山田

3:00 起床 4:30 発～5:30 取り付き～11:00 本峰～1:45B.C.

というわけで、ロングラン中止。私が悪いんだけど……。そこで、予定に入っていなかったが源次郎をやることになった。雪渓を歩いて1時間。やっと取付。ここからコースタイム5時間半ほどの道のりを、他大学に何人も抜かれたが丁度5時間半で登り切る。帰りはカニノヨコバイ・平蔵谷を通過してB.C.に戻る。戻ると井上OBが待っていた。 文責: 山田

8/5 (晴れ) (源次郎側壁中央ルンゼ～成城大) 宗像・井上OB

3:00 起床 4:30 出発～平蔵谷出合～7:30 取り付き～10:00 中央ルンゼ終了点～11:00 成城大取り付き～3:00 終了点～4:30 I 峰発～7:30BC

途中中谷ルートも見上げてみるが、ルートそのものは大丈夫のようだが心の準備ができていないということで、結局中央ルンゼへ。雪渓がへこんだところからシュルンドへ楽に下りることができた。井上さんが酒を撒き合掌。一段登ったところからロープを出す。宗像リードで取り付くが5mほどのぼったところで気休め程度のピトンを打ち、右にトラバースしようとしたところで、足を滑らせフール。予想通りピトンが飛び、ビレーしていた井上さんに受け止めてもらった。漫画のようだ。幸い右足の足の裏をしたたか打ったが、あとは左足をすりむく程度ですんだ。井上さんは「細野が呼んでんじゃないの」とかいているが、一応けがにならなかったのは細野さんのおかげだと考えて、気を取り直して登りなおす。ルートは右ではなく、左に残置ピンがあった。初歩的なルートミスだ。その上は洞窟のようになっていて、その左側壁に井上さんが取り付く。残置も古いものばかりで、その上細かくて結構やらしい。ルート図に書いてあるようなチョックストーンはなかった。その上はがらがらの傾斜のないまさに谷を歩く。全体的にそうだが、このルートは谷だから当然浮石が多く、その上両岸が迫っているだけに、非常に精神的に圧迫感がある。ただ、晴れ続きだったからか、濡れてはいなかった。さらに、V字状になった谷を左側を選んで2ピッチほど登り、滝の下につく。真中の滝を登ったあと、あとはやさしそうなので、ここで終了とした。しばらく登ると正面にI峰側壁が現れる。取り付きはずっと左のほうで、これを見つけるのにしばらく時間がかかった。そこに行くまでも結構やらしい。

1P目 井上さんリードで取り付く。草つきで結構いやな凹角。

2P 目 そのまま宗像リード。右に回り込み、カンテというよりもクラックを登って、ハイマツテラスへ。ちなみにハイマツではなくダケカンバなので注意。

3P 目 左のフェースの右端を井上さんリード。出だしが細かくセカンドは難しく感じた。

4P 目 左のクラック目指してトラバースする。クラックを2メートルほどフリーで登った後、人工になる。登る前はオールフリーでとか考えていたが、荷物が重いし、高度感もあるので、とても無理と判断。そのまま人工でトラバースするが、残置は古いし、利きも甘いので緊張する。さらにその上のクラックを少しフリーで登り、小さなレッジでピッチを切る。最後のほうはギアも完売で、その上人工からフリーに移るのでむちゃくちゃ怖かった。

5P 目 井上さんリード。下から見て左上のスカイラインを登っているときに、フォール。2~3mダイブ。ロープも伸びていたので、それほどショックはこなかった。フォローするとき、アブミやら残っていて、激戦の後が伺えた。

最後のピッチはハイマツの藪こぎでへろへろになる。大きなバンドに出て、そこでギアを片付け、さらに、右のほうから稜線に向かって登る。もう、時間も遅くなっていて、つかれているのでそのまま源次郎尾根を下る。途中3回ほど懸垂をして、ぎりぎり暗くなる前に真砂に着いた。今日入山の古田さんが来ていた。今日入山のパーティーも多かったらしく、だいぶにぎやかになっていた。

文責:宗像

8/6 (晴) 5:00B.C.~7:30C フェース剣稜会取付~10:30 六峰頭~12:00B.C.

今日は我々2人と昨日合流した古田OBと3人でCフェース剣稜会ルートに行った。古田OBがトップで登る。あまり難しいと思う部分はないものの、なんとなく風が寒かった。古田OBは体力が有り余っているせいか、ルートとは違うところを難なく登るものだから、私は1回落ちてしまった。3時間ほどして頭へ。これまでの合宿で疲れている宗像・山田は屋前というにB.C.に引き返す。体力があまっている古田OBはこれから剣岳の山頂に向かう。帰りはV・VIの科尔を通過してB.C.へと戻る。帰ると1時間ほどして古田OBが戻ってくる。やたら早い。この体力を見習わなければ。3時ごろに古瀬OBと合流。ということは、全員で5人となってしまったということだ。我々のテントに寝られるのは4人。よって、宗像が法政のテントで寝ることとなった。現役部員よりもOBのほうが人数が多いとは・・・。

文責:山田

8/6(曇り) <Cフェース剣稜会ルート> 宗像・山田・古田OB

3:00 起床 4:20 発~7:30 取り付き~9:30C フェースの頭~11:30B.C.

8/7(晴)

現役2人と古田・古瀬OBの4人でチンネに登りに行く。井上OBはこの日でお別れ。

朝、メガネが無い。30分ほど探してやっとあった。テント内の物の管理はきちんと行おう。朝こんなハプニングがあり、ちょっと出発が手間取りながらもチンネに向かう。V・VIの科尔を通り、八ツ峰をトラバースして池ノ谷に出、三の窓を通過して出発して5時間でようやくチンネに取り付く。自分の

チンネの一番の難所のところで何回も落ち鎧を使わざるを得なかったが、他の三人は全く危なげなく登り、「流石」という感じであった。帰りも同じ道を通り、B.C.にかえた。

文責:山田

8/7 (晴れときどき曇り) <チンネ左稜線> 宗像・山田・古田 OB・古瀬 OB
3:00 起床 4:30 出発～9:15 三の窓～9:45 取り付き～3:00 チンネの頭 3:30～5:30B/C.

8/8 (晴れ)

4:30 起床 5:50 発～12:30 室堂

今日で下山。別山乗越まではずっと上り坂。今日は最終日と思いながら最後の力を振り絞って乗越に向かうもやはりバテる。何とか乗越まで登って、その後ずっと下るも最後の最後で地獄池のところの上り坂。こんなところに坂など作るな！と一人で不機嫌になりつつ、おばさんに抜かれていった私は体力の無さを実感するのでした。

今回の山行で感じたことは自分の体力の無さ、整理整頓の必要性 etc であった。今後は気をつけていきたい。

文責:山田

6. 個人山行 <越後三山縦走>

9月13日～15日

参加メンバー:山田(1年)、その他1名

9/13 (晴れ) 8:30 大崎里宮～9:30 霊泉小屋～13:00 女人堂～14:30 千本松小屋

越後三山とは、越後駒ヶ岳・中の岳・八海山の3つのことを言う。標高としては中の岳が一番高いが、ほかの2つの山も其々違った個性を持ち、なかなか趣き深い山々だ。

出発前日、なぜか浦佐駅から登山口へと向かう我々を待っていたのはどぶだった。出発当日、どぶでぬれたズボンを乾かないままに八海山を目指す。大崎里宮から高校のときの友達(斎藤)と登り始めると尾根に出るまでは急な坂。この急坂を1時間ほど登ると金剛霊泉と言う美味しい湧き水の出る場所につく。信仰の山ということで、途中の節目には鐘がおいてある。その鐘を鳴らしながら進むと、やがてゴンドラの山頂駅、そして女人堂へ。この女人堂は新築で居心地がいいので20分ほど休憩してから再び千本松小屋へと向かう。途中の祓川で今日初めての人間に会い、最後の鎖場を登ると薬師岳山頂。ここから千本松までは目と鼻の先だ。小屋は避難小屋として開放されていると思ったが、実はそうではなく、2800円(素泊まり)取られ、けちったバス代も吹っ飛んでしまうほどの値段を請求される。水場は5分ほど歩いたところにあり、ほかに2パーティーくらいとまっていた。天気予報によると次の日は天気が悪そうなので、明日いい天気になる事を神に祈りつつ、就寝。

9/14(曇りのち雨) 7:00 千本松～9:00 五竜岳～12:00 オカメノゾキ～15:00 御月山～15:15 祓川～16:30 中の岳避難小屋

朝方雨が降っていた。そのため、八海山の岩場(ハツ峰)を通るのをやめ、巻いていく道を通ることを選択。この巻き道も道が細くちょっと危険。同じ危険ならハツ峰を通れば良かったという後悔の念を持ち、巻き道をたどる。今度来るときは必ずハツ峰を進むことを心に誓いつつ。ここから今回の最大の難所、オカメノゾキまで約 500m ほど下るのだが、五竜岳から荒山まで何の標識もなくなり現在地不明の状況に陥る。いったいどこがオカメノゾキかまったくわからず、最大の難所を通り過ぎたようだ。オカメノゾキくらいは標識をおいてもいいんじゃない、というのが率直な感想。といたつつも、我々の状態はいまだ現在地不明のまま。ちゃんと事前に地図を読みこなしておくべきであった。そして依然として現在地不明のまま高度を上げていくと久しぶりに標識が。御月山。荒山以来の標識に我々感動。コースタイムによるとここから約 1 時間で中の岳避難小屋。到着時間が分ることほどうれしいことはない。急に元気になり雨も何のその。途中の祓川で水をたらふく水を汲み中の岳へと。道はガレ場で登りにくいものの最後の力を振り絞って小屋につく。小屋は無人小屋であったがとっても立派な 2 階建ての小屋。小屋の中には、毛布もシュラフもローソクも醤油も油も鍋もそろっている。タダだし何も言うことはなし。巨人も負けたし。今日きた道のりに自己満足を覚えつつ休眠。

9/15 (雨ときどき曇り)

6:40 中の岳避難小屋～9:30 天狗平～10:10 駒ヶ岳～10:30 駒の小屋～12:15 小倉山～14:30 駒の湯～15:30 大湯温泉

朝、小屋の壁が雨やら風やらでガタガタ言っている。しかし朝方聞いたラジオは翌日台風が北陸地方を襲うだろうとおっしゃっていたため、強行出陣。外に出てみるとそれほど雨も風も強くなく、大丈夫だろうという予感は的中。小屋から 100m ほど下ったら雨も風も吹かなくなり雲の隙間から太陽も覗くようになった。つまりは中の岳のところだけ雲がかかっていたのだ。途中の桧廊下のところもガイドブックが言うほどには歩きづらくなく難なく通り過ぎたといいたいが、タダ笹藪が激しいのにはちょっと辟易した。笹藪に手間取りながらも順調に天狗平まで下っていると、左手に昨日通った尾根が見える。まったくよくここまでできたものだ。天狗平から急な坂を登ってクシガハナからの道と合流して駒ヶ岳へ。駒ヶ岳の山頂はいつのまにか覆われた白い雲の絨毯までまったく視界が利かずここが山頂であるという実感が湧かず、我々はこの「駒ヶ岳」の標識に騙されているんじゃないかという気分になる。何の面白味もないまま駒ヶ岳を後にし、駒の小屋を目指す。駒の小屋までは山頂から 10 分程度。小屋で昨朝ぶりに人間と会う。そういえば今日は 9 月 15 日、祝日だ。というのに、今日はいまだに登山客に会っていない。そしてそのあとも会わなかった。翌日台風がくるというのだから無理はないか。11 時頃小屋を出、一気に駒の湯まで 1700m ほど下る。途中から大雨になり、又斎藤の靴の底が壊れたためになかなかスピードは出せなかったが、我々二人にけがはなく、順調に下山することができてよかった。

そして下山した二人は、実は中の岳山頂に立っていないことに気がついていないまま大湯の温泉に入り、新幹線で静かに東京へと向かうのでした。 文責:山田

7. その他の山行

7/4	榛名山黒岩	宗像・山田・井上 OB・太田(上智大学山岳部 OB)
6/19	奥多摩和名倉沢	久田・古田 OB・古瀬 OB
9/30	丹沢大山	山田

8. フリートーク

「夏のクライミング」

今年の前半は語るに足りるほど登っていないのが実情である。大学院試験の受験勉強で常に時間に追われていたし、それは9月の終わりまで続いた。とはいえ、夏合宿で2年ぶりの本番での岩登りをすることになって、楽しい思い出となった。丸山のBCでうっそうとした緑に囲まれながら、焚き火をしたとき、ほんとに生き返るような気持ちになった。僕の同期の、法政の木島がが言っていたが、「人間は刺激を求める生き物や」。僕もそう思う。その意味で、今年の夏山では収穫が2つ。ひとつはアメリカンエイドを覚えたこと。山岳部に入りたての頃はやることすべてが新しく、子供のような気持ちになれたし、実際、お子様だったのだが、たいがいのことを覚えたような気持ちになると、やたら意味もなく難しいことだけを追い求め、中毒のようになる。別にこれでいいと思うが、2年ぶりのクライミングでのアメリカンエイドは久しぶりだったからかもしれないが、やたら新鮮で、登っていて楽しくて鼻歌のひとつでも歌いたい気分だった。自分で一つ一つ課題を克服していく面白さを単純に感じられた。もうひとつはこれとは対照的、中央ルンゼの取り付けでグランドフォールしたこと。落ちている間も、大変なことが起こったとを感じる暇もなく、ただ、岩肌をすべる自分を無感覚に見つめて、あっけなく井上さんに受け止めてもらった。たいがい僕はラッキークライマーで、これまでさほどきわどい場面に遭遇したことが少ないので、この経験は逆の意味で刺激になった。その後成城大をのぼっても、常に足がすべるんじゃないかと疑心暗鬼だったし、こんなことやっていていいのかと単純に思ってしまった。

とはいえ、人間は忘れる生き物でもある。たいがいいいやなことは忘れてしまって、いい思い出だけを覚えているものだ。かくして、この夏の山の思いでも、僕にとってはいい経験だったし、大体のところ楽しいものだったといっておこう。少なからずこの経験は、この後受験勉強を進めていく上で、とっておくべき対象としてではなく、発展させていかねばならないものとして、念頭においていたものだったに違いない。単純に言えば励みになったのかもしれない。夏は長かったけれど、冬はさすような張り詰めた緊張感がある。それぞれにその対処の仕方があり、日本では四季がある以上それはさけられない。かわして避けるだけではなく、正面から取っ組んでいくことが、なにか自然に正直な気がする。もちろん、取っ組ませてもらってはいると思うが。

月見の宴のお知らせ

OB・OGの皆様、山々の紅葉も美しい季節となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。
さて、今年も例年通り、月見の宴を行いたいと思います。今年は部室が新しくなって初めての月見の宴ですので皆様方たくさんお越しをお待ちしています。今年はゴールデンウィーク・夏合宿等のスライドを準備しております。お誘いあわせのうえ、ぜひ、お越しください。

(日時) 10月30日(土) 6:30～

(場所) 山岳部室

なお、一橋祭は10/30～11/1ですのであわせてお楽しみください。

10月30日は終日部室を開放しておりますのでご気軽にお立ち寄りください。

(部室の鍵番号) 719